

## 海を越える伽藍神 — 日中五山の伽藍神の比定 —

関西大学 二階堂 善 弘

当時、中国南方の有名な寺院を五山と称したが、日本においてもこれに倣った形で京都五山・鎌倉五山が形成された。中国の五山とは、<sup>きんざんじ</sup>径山寺・<sup>りんになんじ</sup>靈隠寺・<sup>じんずじ</sup>浄慈寺・天童寺・阿育王寺を指す。

日本の五山は時期により変動があるが、一般に京都五山は天龍寺・<sup>しょうこくじ</sup>相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺とする。また別格として「五山の上」として南禅寺を据えている。鎌倉五山は、建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺とされる。この他に、<sup>しゅんじょう</sup>俊苒と関係の深かった<sup>せんにゅうじ</sup>泉涌寺も、南宋の寺院の影響を濃厚に受けたものとして知られている。

伽藍神の多くは、宋代から明代にかけては信仰が盛んであったが、その後急速に衰えていき、現在ではほとんど中国では知られていない神となっている。

例えば、中国で宋代から元代にかけて盛んな信仰があった招宝七郎大権修利は、浙江一帯で信仰され、また寺院の伽藍神ともなり、『水滸伝』に名が記されるほどの知名度を誇ったが、その後は信仰が衰えた。そして日本の五山諸寺にて祀られ、伽藍神として残ることになった。ただ、実は寧波の阿育王寺にも招宝七郎の像は残っている。

祠山張大帝も、宋から明にかけて江蘇から浙江において盛んに祭祀されたが、その後信仰が衰えていった。それが日本において、招宝七郎同様に伽藍神として祀られるようになった。その他、感應使者や掌簿判官も同様に現在の日本の寺院に残っている。ただ、幾つかは由来が不明な神があり、そのうちの一つは太白龍王である可能性が高い。

江戸時代の僧である無著道忠は『禪林象器箋』において、建長寺の伽藍神を張大帝・大権修利・掌簿判官・感應使者・招宝七郎とする。道忠は招宝七郎と大権修利を別の神とする。

一方で、鎌倉期の大休正念の『念大休禪師語録』には、「至日上堂。昨夜亀谷生一子、又似亀兮又似鰲。白山、祠山与修利、拍手呵呵笑不徹」という記載がある。すなわち、寿福寺の三体の伽藍神を、「摩訶修利」「白山」「祠山」とする。この白山神は、すなわち天童寺の太白龍王ではないかと考えられる。中国の五山のうち、径山寺は広沢龍王、天童寺は太白龍王を祀っていた。

寿福寺の像が手に如意を持つのは、財を持つ龍王の象徴であると見られる。覚園寺の像も、それを模したものであると推察される。従って建長寺の片手を挙げ、片手を下げている像も、恐らくは如意を持っていた太白龍王ではないかと思われる。すなわち、建長寺・寿福寺・覚園寺の如意を持った像は、すべて太白龍王であって、大休和尚当時は像についての理解があったものが、後に忘れ去られたという可能性が高い。

北宋期の中国に入った成尋は『參天台五台山記』において、実際に目睹していると考えられる次の伽藍神を挙げている。そのうち、王子晋は日本の比叡山の麓に祀られる山王権現である。東嶽は泰山の神である東嶽大帝である。平水大王は招宝七郎である。五通神は華光大帝のことである。

白鶴霊王は後に白鶴大帝とされる神で、後漢の方士の趙炳が神として祀られたものである。その神格化については、方玲氏が「趙炳香火的歴史考察」で詳しく論じている。趙炳が宋朝の皇帝から尊ばれた理由について、方玲氏は皇室の趙姓と同一であることを挙げている。確かに、他神と比べて白鶴大王の事績には目立ったものがない。趙姓ということで他神より優遇された可能性は高い。

東嶽大帝については、言うまでもなく山東泰山の神であり、その信仰は中国全土に広がっている。山神であると同時に、冥界の主催神でもあり、仏教における閻魔王と似たような役割を持っている。一般に「天齊仁聖帝」の称号は、宋の真宗皇帝によって与えられたものであるとされる。もっとも、現在では東嶽大帝を伽藍神とする例はほとんど無い。また東嶽大帝も当時と現在とでは、神格上もかなりの変容が見られる。

天台山は唐宋を通じて、仏教・道教通じての聖地であり、その守護神である王子晋はまた双方から重視される神仙であった。この王子晋のあり方が日本にも伝わり、天台山と山王権現の関係に影響を与えたとされる。ただ、王子晋は日本においてはむしろ熊野権現として顕現した話が知られている。

現在のところ、建長寺の一体についてはまだ比定が出来ていないが、これらの白鶴大帝・東嶽大帝・王子晋である可能性もある。或いは、梵天・帝釈天などのインド系の伽藍神である可能性もある。また検討を重ねたい。